

緑字生ズ

紙田
彰



序 妄想ヲ生ス

彼ハマズ世界ニ対シテ復讐ヲ敢行ス。ソレハ已レノ存在ヘノ断罪デアアル。

彼ハ偶然ヲ誅殺ス。ソレハ必然ヲ屠ルコトヲ使命トス。

彼ハ世界ノ歴史ト一心同体デアアル。

彼ハ世界ノアリウベキ姿ヲ無ノ淵ニ陥レル。

彼ハマズソノ性無垢ナルヲモツテ、無垢ナルモノト文感ス。

彼ハ表面上努メテ凡ナルヲモツテ、行動ノ非凡ヲ成就ス。

無垢トハアリウベキモノデアツテ、神秘ノ側ノモノデアアル。

彼トハイッタイ何者カ。

世界ハ單純ナ錯誤ニヨツテ存在スル。

悲哀ノ根ハソノモトノ初源デアアル。

世界ハ悲哀ノタメニアリ、悲哀ニスギナイ。

悲哀ハナニモノニモ捉ワレヌ点ニ起因スル。

サスレバ初源ハ錯誤デアアル。

ツマリ初源ハ存在シナイ。

存在セヌモノハ夢デモアリエナイ。

デハ、世界ハソノモトアリエナイデアアル。

ワガ腹ハ、ワガ腕ハ、幻ホドニモアリエヌデアアル。

デハ、ワレラハ何者デアロウカ。

ワレラハアリエヌモノヲ見ウベキ不可能デアアル。

不可能ハ存在シナイ。

ワレラハ現ニ存在シナイ。

マシテ、ワレラノ頭腦ソノモノトイエル絶對ハ

夢想ノ夢想トイウ無意味ナルベキモノ。

世界ハアリエモセヌモノノ想像力ニヨツテ成立スルトイウ無意味サ！

千年ノ悲哀ト孤獨トハ、

世界ソノモノガ夢想デアリ、

ソレヲ夢見ルモノモ夢想デアリ、

夢想ノ永劫循環トイウ存在ノ無効性ニアル。

無垢トハ失樂、ツマリナニモノモアリエタコトハナイ。

緑字生ズ

I

nerve fiber の先に

太陽がある 雲がある

空はまた黄金

海には静謐が映る

人と人々に毒を盛る

雨が降り

夜がやって来る

わが手は全季節の果物なり

2

V の字になって発狂する

碧の湖が小波のために淡い

旅のさの

夕焼空と雁の群

太陽はいま沈む

断頭台の首も――

わが対称形が歩く

秋の風がたらぬく

あてどない旅

ポブラよ、銀杏よ、楓よ、

雑木林を渡る風

いつのまにか海に出ていた

しぶきに見え隠れする巖

また島は動かす

地球が母の姿を現わす

ああ 心が凍る

秋の終わる日

人も自然も枯れてゆく

毒草が地幅の折れ目につき込まれる

眠りに包まれ

わがメランコリイの果て

死者もまた同じ

夜汽車よ、海と星よ、

暗い波打ち際に

想い出は寂しい

別れの花を摘む

闇の女の裸体

銀色の毛皮に抱かれるころ

初雪はふるさとを訪れたろうか

月の涙は蒼きもの

昼間からうつつとうしいのに

月光と雪の白い道

月のかげらよ

粉雪に埋る夜々

長い道を歩いていた

なぜそのような無用をするのか

いつまでたつても謎である

土色の骨が指からつきでている

純白のカモメが

山の端で赤くなっている

雪が燃えているからなのか

時が割れる

吹雪、一瞬の吹雪

鬼のような目つきで神に祈る

空が暗れて窓から覗くと

光のほかには何も無い

風が吹く

そのたびに涙する

雪が降る

そのたびに涙をこぼす

悲しいことなど何も無い

3

地平線が破裂する

みはるかすばかりの原野

切れ間なく降る雪

夜はいつかな明けようとし無い

大粒の結晶に興をそそられた少年は

首なしの天の奥を仰ぎ見ている

そのプラスチックの詰め物の中で

雪はとどまり

ひととき降りやんだかに思えた

少年は暗黒の夜をうち眺めている

ありえもしないことだが

粉雪のような星が

全天を蔽った

流れ星すら

千里を

駆る

夢は時間じゃない

幻惑の光は

少年をめざしていた

けれども

空には厚い雲がかぶさり
原野には雪が降り積もり
眠っていたとき思いだした眼りのように
世界が埋められる！
少年の耳はその重みで垂れ下がり
少年の眸は円錐状に尖り
頬からは熱が失われていた
世界は凍っている！
少年の裸が氷のように崩れ落ち
少年の雪が舞うばかりであった。

4

死体が雪の中を走っている
満員電車のスパーク
こま切れにされた死体が
糊のように地面に貼りついている

5

函館山、西の浦、宇賀の浦
腰まで濡れて告白室を出る
鷗と北極星
櫓子窓に凍りついた
緑の卵

6

女よ、まなざしだけの女よ
妄想のほほえみ
一秒が百年となる
赤い唇が永遠に去る
青い空を閉じる
港では汽笛がなる
雪の精は寂しい
少年は
名前のない少女に恋をする

女よ

尖ったあごと
あどけない口もとの
寂しげな女の
天使の顔は
永久に謎である

7

人が生きているというだけの手
悲しみの涙をぬぐうだけの手
あたしの手を握ったのはあなたね

あの日以来 あたしの恋心は永遠よ
この編物を捧げようと かれこれ百年
ほんとにあたしの手つてのろま！
愛を知り初めたとき

もう濡れていたのよ
だってあの日雨
傘を持つ手に滴のかかる

手を空に向けて

光を捜るが

どうせぼくは不始末の子

太陽を握りつぶす

そうすると宇宙は幻——

8

悩みに敢然と立ち向かう苦い魂
ただ激しく生きるこの苦さ

ミュージズ

アフロディテ

また人魚たち

ぼくは龍にもなろう

ぼくはあぶくにもなろう

おお 優雅なる破滅

9

夜の影

書物の病よ

夏がかすかに開いている

あつい欲望につらぬかれて

その頁の間

夜の光と狎れ親しんだ

夏がかすかにふるえて

その色は色を失いしもの

はかない夢寐

はかない悲哀

魚から進化した魚の意識

朝はただ朝である

10

足をとらえる水

道路はゴム棒のようにはわて

真珠の中の声

恋唄にこたえて液が割れる

紙のめくれる音

すさまじい食欲

波のような肉体

つまり青い骸骨
口笛を吹いて
詩を書くのをやめる

緑の光の下で

マラソンランナーが坂を上がると

厩口にハンガリアン・ラプンデューが流れ

早朝の距離はちぢまらない

II

しぐれる暮のどくろのじじい

しぐれる暮のどくろの踊り

やみの話

不思議なくらやみの話

いずれも やみのさよなら

12

働きしりする

棘が深く刺さっている

針のない時計

恐ろしいものが靴の中に潜んでいる

ああ 悪魔

夜の園をみたく

憎しみと至上の愛
沈黙と昂奮
バラの花束が恩寵となる

13

深き御山の彼方

精霊どもの踊りの輪に

翼ともつかぬ御身の姿

さまよい歩き訪ぬれば

いづくに棲むか御身の族

睡蓮の湖はたまた森の奥

御身の声に誘われ

涙も切なく思われて

黄泉の水辺に悪魔城

吾は御身の囚われ人

天使も愛に墮落する

血と殺戮の嵐をわけて

魔のものにならんとぞ行く

死の居城

14

Locust が跳躍する

栄光の灰が降る

賭博場の隅できらきら光る幸運

深まりにつづく道

運河に沿って大陸を捨てる

待つこと

待機するとうひと眠り

洛陽に帰れ 洛陽に帰れ

春の日差しの

悲しい微笑

わたしの溪間においでなさい

夏が近づく

わたしの汗が

とても切ないのです

黄 河 ホアンキ 燃え上がる天と地

15

ぼくの脚は一つしかない

ぼくの眼は一つしかない

けれども

夜が暗いからではない

妹の死の床に

黄色い体液が残される

16

真夜中の夏

紺碧の空にトランペット

犬族の遠吠えを聴く

女の目の中にある雨

潮の流れが冷たい

砂浜は濡れているが

女の寝床はさらに悲しい

ニセアカシアの梢がゆらぐと

夏は去った

雨雲が蜚集して

小窓の隅に

白い花びらが落つ

宿六よ、また旅へ

17

涙するグアナコ
 スケートに乗る異国の少女
 この世の *Heart* を
 あの世の *Heart* にすり替える
 秘密の会話が
 またとぎれる

18

豊かな農園が
 海をへだてた半島にある
 子供らの奇怪な成長が
 むくむく黒雲となり
 雷雨が、密林が、
 古代の神々を串うという

19

落葉松と遺跡監視人
フイッシュ・ゲーム
 赤土には
 秋風とともに
 ファルスが生える
 白い針で刺んだ女の名を
 パンキで塗ると

雨にうたれた一枚の枯葉が
 青史に残る

20

銅鑼が鳴る
 メルポメネー
 ああ 秋の深い湖
 裸女の像が永遠を見つめる眼で
 命を光らせている
 また季節風が吹く
 甲板に出て
 貝殻でできたパイプを拾う
 こども去らねばならぬ
 みちのくの旅は終りぬ

田沢湖の畔に
 杉の木立が高い
 収穫期の田園よ
 恋に破れる夢よ
 涙を流すものは罪深きものなり
 乳頭山が湖面に漂う
 無数のボートと

一箇の遊覧船
水底に沈んだ恋人よ哀れなり
雲の切れ切れに
センチメンタルが流れてゆく
カラスも冷えてゆく

青函連絡船は外洋にある
カムチャツカ半島よ、シベリアよ
いま航路は凍っているか

垂直なる託宣板をモーセの金かくしという

21
乱に曰く

稲架も取り払われ
農夫も土地に埋れる
田の土は
凍った白夜

22
たちもとおる

君に会えたのも
月のモノのなせるわざ
そも梅のいらたか

幸せと不幸の返礼を思うだに
凍える心

23
寂しい夕暮とセレナーデ

枕言葉に冷や死んす
美女の足下に
人も知らない秋の草本
ガラスのかかどが
荒れ野に埋っている

24
クレイオーよ

地球儀が欠けている
眼は半月だ
クルティウスの分類は
デルフォイを四つに分つ
人生の短促
乱心御用おまる割り
急行列車が塩の水に漬っている

25
宗教とはジャイロ効果

午後 稲妻が疾つた
みぞれが夜半までつづいた
あたたまるために呑んだ
一杯のウイスキーが
寒さをこごえさせた

藍色の山の端を

行者がひとり登っている
ピアガーデンは閉鎖されたが
ラグビーボールを抱いている
ああ あの豚の膀胱!

26

狂気のはじめとおわりが永遠だ
いまは塩汗 肌合わせ
はじめとおわりが遠っついでも
世界は一貫している
何を遺そうと反故
何を遺そうとも沙
神はまだいたぞ
一家に伝わるまがいものの器

27

ウイスキーが死んだ

グラスのかわりに
骸骨をつかんだ
黒衣の女が
エンゲージリングを破棄する

28

もろい骨が
ガラス細工のように
鋭く突き出たかかと
貞操帯と卵
冷たいアスファルトに接吻し
その割れ目から生まれる舌

ツリガネソウが揺れる
鏡には妻の顔
つがいの蛇を
少年の匂いが追いかける
夜まで待てぬ
地平線に女を残して
ベルセウスは出奔した